訳注『出雲名勝摘要』（一）

要木純一

『出雲名勝摘要』（明治十四年　一八八一刊）は、松江出身の教育者・漢学者の星野文淑が、出雲地方の名勝をいくつか取り上げて、由緒を解説し、その地を詠んだ漢詩、和歌、誹諧を配したものである（多くは同時代の作品。江戸時代に溯るものもある）。当時の出雲漢詩壇、歌壇、俳壇のそれぞれの巨頭、雨森精翁、中村守手、山内曲川の校閲を仰いでいるが、おそらく、彼らは編輯段階で作品選択等の指導に相当関わったと思われる。本書は、出雲の文学史のみならず、神話伝承、観光史、風俗史の資料として、貴重である。原本が入手しにくくなっているので、筆者はかつて島根大学付属図書館所蔵の本を翻刻した。（『山陰研究』第四号　二〇一一年一二月）しかし、一般読者には読みづらいものであり、明治初期の出雲文化の考究を志す、訳者自身も正確に内容を把握する必要を感じ、ここに全訳注を試みることにした。俳諧・和歌については、訳者は、専門家ではないので、初歩的な恥ずかしい誤りも多いかと思うが、これをたたき台にして、諸賢の指導を受け、今後の改正を期したいと思う。

原本には妹尾春江による絵図がついており、本書にとって無論不可欠なもので、図像学的にも論ずるべきものがあるように思うが、割愛した。原則として常用漢字体を用いたが、筆者の趣味によって、旧字体のままにしたものもある。漢詩文の原文は白文であるが、訳者なりの訓読を示した（現代仮名遣い）。句読点、分かち書きは、読みやすいように適宜付け加えたり、改めたりした。振り仮名は、原文に殆ど無いが、訳者なりに全文施した。初学者に通読しやすくするためであるが、訳注者も殆ど初学者のようなもので、初歩的な間違いをあらわにして、諸賢の是正を請うためでもある。和歌・誹諧は、原文を尊重して、歴史的仮名遣い、字音仮名遣い（現在通行のもの）を用い、現代仮

名遣いを（　）内に示した。それ以外の漢詩訓読文・説明文は原則として現代仮名遣いを用いた。原文は殆ど濁点を施していないが、訳注者の独断で施した。人名・地名の振り仮名は、諸事典等にあるものを流用したが、読みがわからない場合や疑問のある場合は訳注者の独断に係る。人名・地名の説明は諸事典に見える有名なものは簡潔にした。稀見資料にのみ見えるものは注意を促した。わかりやすくするために通し番号を振った。

【表紙題簽】
出雲名勝摘要
【注】島根大学付属図書館所蔵本には、「宇佐美蔵書」、「柴山」の蔵書印あり。

【表紙裏】
雨森精翁先生
中村守手大人　閲　　星野文淑　編
山内曲川宗匠

出雲名勝摘要【大字】

文会堂蔵
【注】島根大学附属図書館所蔵本には、「柴山重幸」の蔵書印あり。　雨森精翁―一八二三～一八八二。通称謙三郎。別号は、本書に出てくるものでは、老雨、有所於帰村荘主人。漢学者、もと松江藩儒。この時期は平田に隠居、後進の指導をしていた。（『島根県歴史人物事典』　一九九七　山陰中央新報社）　中村守手―一八二〇～一八八二。国学

者、歌人。中村守臣の養子。もと松江藩修道館教授。この時期は熊野大社宮司。（『島根県歴史人物事典』）　大人―師に対する尊称。うし。また、たいじん。和歌の師に対してよく用いる。　山内曲川―一八一七～一九〇三。松江生まれの俳人。諸国遊歴後、松江に帰り、茶道、俳諧をひろめた。（『島根県歴史人物事典』）　宗匠―文芸・技芸の道の師匠。　星野文淑―ふみとし、ふみよしの読みもあるようだが、漢学者風に音読みの振り仮名を施した。一八五七～一八八七。別名、成章。教育者。『出雲史略』の著者。内村鱸香の弟子。（『島根県歴史人物事典』）　文会堂―園山文会堂。園山喜三右衛門（一七九六～一八七〇）の創業（一八一一）。（『島根県歴史人物事典』）この時期はその二世が店主であったのだろう。　閲―校閲ではあるが、実際は作品の選択に深く関わっていたとみてよいだろう。　蔵―蔵版（板）。版木を所蔵していること。出版者を指す。

序

出雲名勝之多、不必讓畿甸諸国、而独地誌未全備、希世之蹟往々薶没而不顕、可不惜乎哉。余嘗欲周遊一回、作書以資済勝之士、而為家累所羈、未暇也。有以待其人也、久矣。乃如星野文淑、則其人乎。文淑少有勝情、単身飄然。凡霊境奥壤足能得造者、靡幽不探、靡深不窮。必徴之史冊、或参以故老之言、又教善画者作之図、且係焉以今古名人文詩、彙為若干冊、以便遊者、名曰、出雲名勝摘要。蓋亦地誌之亜也。頃文淑将録以公之。来請曰、先生以為可伝、則幸賜一言。余乃謂曰、善哉挙也。名勝待人而彰、人亦因名勝而伝。二者未始不相遇而済美也。今夫趙氏之璧、天下之至宝也。非和氏不能成其為宝、而和氏之名亦以璧遂聞天下。文淑為名勝之和氏也、多矣。其得名、亦将在此乎。盍速刻之。異日幸得畢昏嫁作鞵韈之遊乎、請以此書為南針。雖然、我老矣。

明治十三年十一月

有所於帰村荘主人撰

【訓読】序。

出雲名勝の多きは、必ずしも畿甸諸国に譲らず、而して独り地誌未だ全ては備わらず、希世の蹟往々にして湮没して顕れず、惜しまざる可けん乎哉。余嘗て周遊一回し、書を作りて以て済勝の士に資せんことを欲するも、家累の羈する所と為り、未だ暇あらざる也。以て其の人を待つ有る也、久し。乃ち星野文淑の如きは、則ち其の人なる乎。文淑少くして勝情有り、単身飄然たり。凡そ霊境奥壤の足の能く造るを得る者は、幽として探らざるは靡く、深として窮めざるは靡し。必ず之を史冊に徴し、或いは参するに故老の言を以てし、又善く画く者をして之が図を作ら教め、且つ焉に係くるに今古名人の文詩を以てし、彙めて若干冊と為し、以て遊ぶ者に便ならしむ。名づけて出雲名勝摘要と曰う。蓋し亦た地誌の亜也。頃ろ文淑将に鋟みて以て之を公にせんとす。来りて請いて曰く、先生以て伝う可しと為さば、則ち幸いに一言を賜え、と。余乃ち謂いて曰く、善き哉、挙也。名勝は人を待ちて彰れ、人も亦た名勝に因りて伝わる。二者未だ始めより相い遇いて美を済さずんばあらざる也。今夫の趙氏の璧は、天下の至宝也。和氏に非ずんば其の宝為るを為す能わざる也、而して和氏の名も亦た璧を以て遂いに天下に聞ゆ。文淑の名勝の和氏為る也、多なり。其の名を得るや、亦た将に此に在らんとする乎。盍ぞ速やかに之を刻せざる。異日幸いに昏嫁を畢えて鞍韉の遊を作すを得ん乎、請う此の書を以て南針と為さん。然りと雖も、我老いたり、と。

明治十三年十一月

有所於帰村荘主人撰

【訳】出雲に名勝が多いのは、おさおさ近畿地方の諸国には劣らないのだが、ただ地方誌に完全なものがないために、世にまれな名所旧跡が往々にして埋没して知られていない。何と残念なことであろうか。私は以前出雲を一周めぐって、案内書を物して、景勝愛好家の便に資しようと志したことがあるが、家族のあれやかれやにしばられて、その時間がなかった。私に代わってしかるべき人がこの任を担ってくれないか、長い間待望していたが、星野文淑君のような人こそまさに適任者であるといえようか。文淑君は若いときより、自然に対して優れた感性を持ち合わせ、独りだけで各地を放浪した。神聖な場所や奥深い土地で、足でいける場所は、幽玄な地で探検しないところはなく、奥

深い地も行き着くところまで行き着かないことはなかった。必ず史料にあたり、故老の言い伝えを参考にした。さらに、絵のうまい人に絵を描かせ、今古の名声高い人々の詩文を付け加え、何冊かに編輯し、観光するものに便利なようにした。そして、『出雲名勝摘要』と名付けたのである。これはほぼ地方誌といってもよいものであろう。文淑はこの書を印刷、公刊しようとして、私の所に頼みに来た。「先生はこの本が後世に伝えるべき価値があるとお思いですか。もしそうお思いでしたら、序を書いて頂くとありがたいのですが」。私はこのときとばかりにいった。「今回の君のこの行動はすばらしい。名勝はしかるべき人が現れるのを待って初めて顕彰され、その人の名も名勝によって後世に伝わるわけだ。この二者は、必ず、お互いに出会って、ともに成功することになっているのだ。趙国の璧は宝物であるが、和氏がいなくては宝物となる運命が成就できなかった。そして、和氏の名もその璧でもって天下に喧伝されたのである。文淑君が出雲の名勝に於いて、この和氏の役目を果たすことは多大なものがあった。文淑君が名声を得るのもこの書物の出版によることであろう。ぜひ早く出版しなされ。娘の結婚話が片付いたら、わらじやくつしたを用意して旅にでもでかけようか。そのときはこの本を道案内としよう。だが、残念なことにわたしも老い先短いのだが」。

明治十三年十一月

有所於帰村荘主人撰

【注】畿甸―都の近くの地域。日本では近畿地方。周書・蕭察傳「昔方千にして畿甸」。韓愈・潮州刺史謝上表「（天子は）萬里の外、嶺海の陬に在りと雖も、之を待つこと一に畿甸の間、輦轂の下の如し」。　地誌―地方誌のこと。地志に同じ。張華・博物志巻一「余は『山海經』及び『禹貢』、『爾雅』、『說文』、地志を視るに、悉く備れりと曰うと雖も、各の載せざる者有り」。ここでは、京名所図会や江戸名所図会のような、図つき一般観光者向け案内のようなものを想定するか。　希世―世にまれな。王延壽・魯靈光殿賦「邈として希世にして特り出づ」。　薤没―埋没に同じ。才能が発揮されずに隠れてあらわれないこと。庾信・哀江南賦「功業夭枉し、身名埋沒す」。韓愈・送進士劉師服東帰「奈何んぞ埋没に任せ、自ら騰軒を求めざる」。　周遊―あまねく旅行すること。史記太史公自序附司馬貞

索隠述賛「周遊歴覧すること東西南北」。　家累―家族。足手まといのニュアンスが強い。晉書戴洋伝「初め混は其の家累を迎えんと欲す」。韓愈・与李翺書「家累僅んど三十口」。　済勝之士―山水を愛し、探検に耐えられる頑健な体を持った人。劉義慶・世説新語・栖逸「許掾は好んで山水に游び体は登陟に便なり。時人云う、許は徒だに勝情有るのみに非ず、実に済勝の具有り」。　勝情―前注参照。山水を愛する高邁な趣味。　単身―ひとりで。妻子に煩わされぬ独身というニュアンスがある。左伝・昭公十四年「老疾を養い、介特を收む」。杜預注「介特は単身の民也」。三国志・蜀志・郤正伝「張通妻子を捨てて、単身随侍す」。　飄然―何の目的もなくあちこちぶらぶらする様。葛洪・抱樸子・明本「而して中世以来、道を為すの士、飄然として跡を幽隠に絶たざる莫きは、何ぞ也」。　霊境―寺社が建てられるような、宗教性を帯びた荘厳な景勝地。江淹・雑体詩・效謝霊運游山「霊境信に淹留す」。柳宗元・界囲岩水簾「霊境状す可からず」。　奥壤―奥深い辺鄙な田舎。沈約・齊故安陸昭王碑文「姑蘇の奥壤」。　済美―美徳を成就すること。左伝・文公十八年「世よ其の美を済し、其の名を隕さず」。　趙氏之璧―戦国時代、楚の卞和が山中で得た宝玉。厲王・武王に献じたが真価が認められず、足を切られる罰を受けた。最後に文王に献じて初めて宝玉であることがわかった。後に趙王の手に渡った。和氏の璧。連城の璧。　亦将在此乎―亦た将（は）た此にあらんか、と訓ずるべきか。　昏嫁―婚嫁に同じ。雨森精翁には三女がいた。　鞵韈之遊―鞵は鞋に同じ。くつ。漢音はカイだが、唐音のアイが通行。韈はくつした。鞋韈之行は、わらじやたびをつけて長旅に出ることとして、日本ではよく使用するが、中国では用例がなく、出典や由来不明。　南針―指南針。方位磁石。初心者への指導や案内書（指南書）。王守仁・伝習録「真に是れ箇の試金石、指南針なり」。　有所於帰―雨森精翁の晩年の号。韓愈・与孟東野書「無所於帰」（帰るに所無し―乱によって帰るのにしかるべき場所がない）を逆転して用いた。帰るに所有り。隠居すべき安住の地を見つけたという気持ちか。

凡例

一本編ハ出雲国内ノ最モ著名ナル名所、古跡ヲ拾フモノナレドモ、未ダ一二ノ漏脱ナキ能ハズ。

一詩文、和歌、誹諧ハ総テ人ノ古今ヲ問ハズ抜萃スト雖ドモ、期ノ既ニ迫ルヲ以テ、亦未ダ遺漏ノ憂ヲ免ルヽ能ハズ。一編中、毎題其由緒ヲ記シ、以テ看客ニ便ニスレドモ、其或ハ幾里町ト曰ヒ、或ハ何丈尺ト曰ヒ、或ハ幾何間ト曰フハ、皆是レ概算ニ出ヅルモノニシテ、敢テ精算ヲナスモノニアラザレバ、幸ニ之ヲ諒セヨ。

明治十四年一月　　編者誌

【訳】凡例

一。本書は出雲国内の非常に有名な名所、古跡を選んだものであるが、一二収録を漏らさざるを得なかった。

一。詩文、和歌、誹諧は全部、現在の人過去の人を問わず、その優れたものを選んだが、締切が迫っていたので、重要なものをいくつか残した不安がないわけではない。

一。本書では、一つの名勝の題目ごとに、その由緒を記し、読者の便に供した。しかし、何里、何町、何丈、何尺というのは、皆概算によったもので、精密に計測することなどとてもできない。どうかご寛恕頂きたい。

明治一四年（一八八一）一月　編者しるす

【注】抜萃―抜粋に同じ。重要なものを選ぶこと。　看客―かんきゃく。看官と同じく、芝居や講談の見物人。引いて読者の意味。　里―日本の里。約三・九キロメートル。度量衡は時代・地方によって違うが、一八九一年にメートル法に換算して公式に定められた。明治初年もそれほど変わりはないであろう。　町―長さの単位。約一〇九メートル。　丈―約三メートル。　尺―約三〇センチメートル。　幸―「・・・を幸いとす」ということから、「どうか・・・してほしい」の意。　精算―清算ではなくて、精密に計算すること。　諒―事情を理解する。

【本文】

出雲名勝摘要巻之上

星野文淑　編

【注】巻之上となっているが、続刊は未見。おそらく、星野文淑の死によって中断されたのであろう。版心は「出雲名勝摘要」になっている。

○千鳥城

一名ヲ亀田山城ト曰フ。松江殿町（島根郡）ニアリ。慶長十二年、堀尾吉晴月山城ヲ移ツシ、名クルニ此名ヲ以テス。山ヲ盾トシ渠ヲ幕トシテ、其要害ハ山陰ノ巨擘タリ。後チ京極氏、松平氏ヲ経テ、二百六十餘年（明治四年）ニ至タリ、藩主去ル。爾来修繕ヲ加フルモノナシ。垣壁ハ為メニ壊レ、堡寨ハ為メニ崩レ、今ハ唯牙城ノ松間ニ屹立シテ、寒鴉ノ啞啞ト晩靄ニ飛テ之ヲ守ルノミ。

【訳】別名亀田山城。松江殿町（島根郡）にある。慶長十二年（一六〇七年）、堀尾吉晴が月山城をこの地に移転し、この名をつけた。山を盾に、堀を幕のようにして、その要害たる様は山陰随一である。その後、京極氏、松平氏と統治したのち、二百六十数年たった明治四年（一八七一）になって、藩主はこの地を去って東京に行った。それ以来修繕をするものもいない。そのため城壁は壊れ、寨も崩れ、今は天守閣のみが松の間にそびえ立って、冬の烏がぎゃあぎゃあと夕靄のなかを飛んで、城を守っているだけである。

【注】千鳥城―松江城。屋根の形状が千鳥の羽を広げた様に似るのに由来する。　堀尾吉晴―一五四三～一六一一。安土桃山時代の武将。豊臣家三中老の一人。関ヶ原の戦いでは東軍につき、一六〇七年、出雲・隠岐二四万石に加増移封。一六一一年、松江城竣工。その数ヶ月前に死去。堀尾吉晴が千鳥城と名付けたかどうかは未調査。孫の忠春が二代目の城主となるが一六三三年死去。廃絶。　月山城―安来市広瀬町富田。戦国時代、尼子氏が本拠とした。　要害―重要な防御地点。味方にとって重要で敵にとって害となることから。史記・秦始皇本紀賈誼論「良将勁弩は要害の処を守る」。　巨擘―親指。転じて多くの中から特に目立つもの。　京極氏―若狭小浜城より移った京極忠高（一五九三～一六三七）が一六三四年松江城主となったが、一六三七年死去により一代限りで廃絶。　松平氏―松平直政（一六〇一～一六六六）が、一六三八年信濃松本城より移り、以後十代松平氏が統治。　藩主―十代松平定安（一八

三五～一八八二）。明治四年、廃藩置県により、定安は知藩事を免官、松江城は廃城。その後、明治8年（一八七五）民間に払い下げられ取り壊しの可能性が出たが、有志の奔走によって、天守閣のみかろうじて保存されることになった。この書が出版された頃は、手入れをする余裕がないままに放置されていたのであろう。　垣壁―垣牆に同じ、城の石垣をさす。書・費誓「敢えて寇攘し、垣牆を踰え、馬牛を竊み、臣妾を誘う無かれ」。旧五代史巻五十三「垣壁の成り難きを悪む」。　堡寨―とりで。三の丸、物見台等の城の附属建築物をさすか。司空図・華帥許国公徳政碑「並びに堡寨七所を収奪す」。　牙城―本来は、主将が本拠地とする都市。主将が牙旗（尖端を象牙で飾った旗）を掲げるのでかくいう。資治通鑑・後梁太祖開平元年「渥父行密の世、親軍数千営を牙城の内に有つ」。ここでは、城の中で主将のいる所。本丸。更にその中心に建てられる天守閣をさす。きばのようにそそり立っているという気持ちもあろう。　屹立―山のように垂直にそびえ立つこと。李荃・大唐博陵郡北岳恒山封安天王銘「雄峰屹立して而して朝山邐迤たり」。　寒鴉―寒々としてこごえそうになっているカラス。王昌齢・長信秋詞之三「玉顔は及ばず寒鴉の色の、猶お昭陽の日影を帯びて来るに」。　啞啞―鳥の鳴き声。カラスの場合が多い。焦贛・易林・師之萃「鳧雁啞啞、水を以て家と為す」。李白・烏夜啼「黄雲城辺烏は棲まんと欲す、帰り飛びて啞啞と枝上に啼く」。

1　　中島樓隱

風壤竟帰神化敦、英雄割拠跡徒存。息兵猶足鍛鋼産、征利唯無煮海村。苔菜貢新十六島、城営尋古八重垣。富強別逞経綸術、不用書生越俎論。

【訓読】風壤竟に帰す神化の敦きに、英雄割拠する跡徒らに存す。兵を息めて猶お足る鍛鋼の産、利を征めて唯だ無し煮海の村。苔菜新たなるを貢ぐ十六島（うっぷるい）、城営古えを尋ぬ八重垣（やえがき）。富強別に逞しくす経綸の術、用いず書生の俎を越えて論ずるを。

【訳】この出雲の風土は結局は神の教化に帰していったのである。群雄割拠の時代は去り、その跡（古戦場）が空しく残るばかり。戦いが終わってもなお、武器を作る技術は、たたら生産を発展させるのに役だった。経済的利益追求

の点では、海の近くなのに海水を煮て塩を作る地域がないのだけがちと残念。海苔はとりたてほやほやの十六島海苔が産するし、千鳥城は、いにしえぶりを目指したのか、素戔嗚尊の故事にならって、八重の石壁をめぐらしている。（などと偉そうなことをいったが）富国強兵策については、別に立派な方々がその国家経営能力を存分に発揮しているのだから、書生っぽの私が分を越えて論ずることはあるまい。（松江藩はたいへん恵まれた地方だ）

【注】中島樓隠―一七七九～一八五五。江戸時代後期の儒者、漢詩人。京都の人。この詩の出処は不明。内容から見て松江を実際に訪れたときの作品であろうが、時期、背景は未調査。（『日本人名大辞典』　二〇〇九　講談社）　風壤―風土に同じ。北斉の裴讓之・公館宴酬南使徐陵詩「方域は風壤を殊にす」。杜甫・野望「雲山は五嶺を兼ね、風壤は三苗を帯ぶ」。　神化―神秘的な力で世界を変えること。易・繫辞下「神にして之を化す」。また、神霊による教化。蔡邕・陳太丘碑「神化は民物に著われ、形表は丹青に図す」。沈約・佛記序「神化感に応じ、参差として互見す」。出雲神話の地にふさわしく、大国主命の霊力と教化に民がしたがって、出雲国が平和に治められていることをいうのであろう。徳川家康や松平定政を指すのではあるまい。　英雄割拠―三国志のように、地方ごとの勢力が天下を分割して占拠すること。ここでは、戦国時代の尼子氏をさすか。漢書・敘伝下「河山を割拠し、此を保して民を懐かしむ」。杜甫・丹青引「英雄割拠は已む矣と雖も、文彩風流は猶お尚お存す」。　息兵―戦争をやめて、武器を捨てること。戦国策・秦策二「宜陽未だ得ず、秦の死傷する者衆し。甘茂兵を息めんと欲す」。杜甫・奉送卿二翁統節度鎮軍還江陵「留滞して衰疾を嗟く。何れの時か兵を息むを見ん」。　鍛鋼産―出雲は、江戸時代、たたら製鉄の有数の産地であった。　征利―利益を求めること。孟子・梁惠王上「上下交も利を征めて而して国危うし矣」。趙岐注「征は取也」。　煮海―海水を煮て塩を生産すること。陸贄・議減塩価詔「煮海の利を専らにし、以て国を贍わすの術と為す」。蘇軾・表忠観碑「吳越地は方千里、帯甲百萬、山を鋳て海を煮、象犀珠玉の富は、天下に甲たり」。　苔菜―もとは紫菫という野菜。李時珍・本草綱目・菜一・紫菫「集解蘇頌を引きて曰く、紫菫は江南吳興郡に生ず。・・・豫章郡は苔菜と名づく」。晏子春秋・雑下十九「晏子斉に相たり。十升の布を衣、脱粟之食は、五卯、苔菜ある而已」。ここでは、海苔をさす。　貢―貢納。厳密には藩に納めるということであろうが、松江に出荷する程度の気持ちで使って

いるか。　十六島―島根半島の北西部にある岬。十六島海苔の産地として著名。「うっぷるい」（語源未詳）と読むが、それではリズムが悪いので、訓読する場合は、漢字音で読み下したであろう。　城営―城や軍営。松江城をさすと考えるべきであろう。編者もこの詩を千鳥城題下の冒頭に掲げているのでそう考えていたと思われる。晋書・天文志「其の城営皆屠る可し」。　八重垣―幾重にもめぐらした垣根。松江城の城壁を、『古事記』で素戔嗚尊が詠んだ「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」に見立てた。この歌にちなんで造られた八重垣神社や須佐神社は、市内より遠いので、意識はしていたかもしれないが、直接に言及しているのではあるまい。　富強―富国強兵の政治。管子・形勢解「主の功を為す所以の者は、富強也」。史記・李斯列伝「李公は商鞅の法を用いる。風を移し俗を易え、民は以て殷盛にして、国は以て富彊（強）なり」。　逞―能力を十分に発揮する。　経綸―綸はもと倫に作る。今正す。糸を整えること、引いて天下を治めること。易・屯「雲雷屯す。君子以て経綸す」。礼記・中庸「唯だ天下の至誠のみ、能く天下の大経を経綸し、天下の大本をたて、天地の化育を知ると為す」。　書生―読書人。政治に携わらない口先だけの知識人という卑下のニュアンスがある。東観漢記・趙孝伝「郵亭に上れば、但だ書生と称す」。　韓愈・与鄂州柳中丞書「閤下は書生也。詩書礼楽を是れ習い、仁義を是れ修め、法度を是れ束す」。　越俎―尸祝（かたしろとはふり）が、樽俎（さかつぼといけにえの肉を備える台）の向こうの庖（料理人）の役目に代わることから、自分の職分を越えて、他人のことにまで世話をやくこと。荘子・逍遙游「庖人は庖を治めずと雖も、尸祝は樽俎を越えて之に代らず」。

2

劉石秋

魚膾堆盤白玉光、雲州酒冽割人腸。巨鱸三尺江南美、駿馬千群冀北良。午笛舟迷橋柳影、春旗城掩渚花香。泮宮日暮経筵散、一路咏帰多乗黄。

【訓読】魚膾盤に堆し白玉の光、雲州酒は冽く人腸を割く。巨鱸三尺江南の美、駿馬千群冀北の良。午笛舟は迷う橋柳の影、春旗城は掩わる渚花の香。泮宮日暮れて経筵散じ、一路咏じて帰るは乗黄多し。

【訳】刺身が皿に盛られてまるで白玉の光のようだ。それに出雲の酒は清冽ではらわたがきりさかれるようだ。おおきな鱸は三尺で江南の鱸にまがうおいしさ。速いうまは千匹も群れて冀北の良馬にもまさるとも劣らない。昼に笛をききつつ、舟は橋の柳の影の中を迷うが如くのろのろと進み、春風に旗のはためく城はすっかり渚の花の香りにおおわれる。夕暮れ藩校は経典の勉強が終わり、道をぞろぞろと詩を詠じながら（古典をそらんじながら）帰るものの中には、立派な葦毛の馬に乗っているものが多い。

【注釈】劉石秋―一七九六～一八六九。江戸時代後期の儒者。豊後の人。後京都で開塾。リアルな描写から見て、実際に松江を訪れたことがあるようであるが、未調査。　堆盤―陸游・初夏行平水道中「村店盤に堆く豆夾肥ゆ」。雲州―出雲国、松江藩のこと。　割人腸―割腸は、もとはらわたがずたずたになるような憂いの深いさま。それを、わざと国語の「酒が五臓にしみわたる」意に用いて、大仰さによるおかしみを狙った。　鱸―中国江南の特産。実は日本の鱸とは違う淡水魚。三尺もない。松江のスズキ料理は、松平治郷の頃より奉書焼きが著名。　冀北―今の河北省あたり。馬の名産地。左伝・昭公四年「冀の北土は、馬の生ずる所」。韓愈・送温処士赴河陽軍序「伯楽一たび冀北の野を過ぎて馬群遂に空し」。　午笛―作者が松江で船遊び（大橋川か、堀か）をしているときに、笛を誰かに吹かせて楽しんだと考えたい。或いは、下句との関係で藩校や城の何かの合図か。　春旗―杜甫・晩出左掖「昼刻伝呼浅く、春旗簇仗斉し」。春の季節に城に何かの幟がはためいていると考えた。或いは上句に合わせて、作者が酒旗の下で遊興しているということかもしれない。　城―中国では、（城壁に囲まれた）まちのことであるが、ここは、日本の「しろ」、すなわち松江城界隈ということでいいのだろう。したがって、渚の花は、堀の岸辺の花ということになる。　経筵―天子が経書を学ぶ席。ここでは、藩主が藩校の講義に臨席したのであろうか。あるいは、藩主は関係なく、単に藩士たちが、藩校で儒教経典を勉強したということか。いずれにせよ、作者は藩校に直接関わっているのではなくて、傍観的に眺めているのであろう。　泮宮―泮はもと洋に作る。今正す。もと泮水のほとりに建てられた、周代の魯の学校。転じて藩校をさす。この藩校がどの時期、どの場所のものかは未考。　乗黄―もと四頭の黄色の馬。この場合の乗の字は仄声。詩経・秦風・渭陽「路車乗黄」。ここではひろく立派な馬を指すのであろう。

3　　島　重養

亀田山　あふぐ大城は　松にのみ　残るもあはれ　萬代の声

【訳】亀田山に、見上げるほどの巨大な城。創建当時の人はこの城がいつまでも続くように「万歳」と声を張り上げて祈ったことであろう。ところが、その甲斐無く、今では荒れ果て、松が風に鳴る音に、往事の声がかすかに残っている如く空耳が聞こえるだけ、何ともかなしいことだ。

【注】島重養―一八一二～一八八三。江戸後期―明治時代の神職。島重老の長男。出雲大社の上官職をつぐ。父に国学、歌学などをまなび、和歌にすぐれた。明治五年の世襲の上官職廃止以降は、同社の禰宜となる。（『日本人名大辞典』）。　大城―「き」は本来垣や柵に囲まれたとりでを指す。万葉集「筑紫の国は敵守るおさへの大城そと」。それを、近世に、城を題として詠むときに雅語として古風めかして流用したものと思われる。以下の歌四首は、おそらく松江城で歌会などを催して、同じ約束事で、歌を詠みあったのではないか。例えば、「城」は「き」として読み込む、亀、鶴、松などめでたい長寿に関わる縁語を用いる等々。　松にのみ―松に城の再興をひたすら「待つ」ことを掛けていると思われる。有家「誰かはと思ひ絶えても松にのみ訪れてゆく風は恨めし」。　萬代の声―今の御代が永久に栄えることを祈りたたえる声。万歳の声。ここでは、松江城および藩が永続することを祈願したことをさすのであろう。月清集「席田のいつ貫川の頻きなみに群れゐる田鶴のよろづよのこゑ」。

4　　武田道年

萬代の　亀田の山と　思ひしを　人だにすまず　なりにける哉

【訳】亀のようにいつまでも長く続く亀田山だと思っていたのに、人すら誰もすまなくなってしまったのだなあ。

【注】武田道年―『和学者要覧』（國學院大學日本文化研究所編　一九九一　汲古書院）に、「国学者、出雲出川清流男」とある。近年、蘆田耕一島根大学名誉教授によって、『出雲国皇学者歌人学系略初編』（古曽志家興編　一九二二私家版）が発見され、影印された（蘆田耕一『出雲歌壇覚書』　二〇一一　私家版所収）。これにより当時の出雲の

歌人達の略歴がかなりわかるようになった。記してご学恩に謝する。この書の「島重老門人録」の項に「出川道年意宇郡来海村農兵太郎ト称ス」とある（一四頁）。　人だにすまず―具親「思ひ入る人だにすまずなりにけりこれより絶ゆる岩の通ひ路」。

5　　北島三綱

むれわたる　田鶴の羽風に　亀田山　城の辺の松も　千代よはふなり

【訳】一面に群れて空を渡っていく、鶴の羽が強い風を吹き付けるので、亀田山の城のあたりの松も、何千年も地に這った姿でいるのだ。

【注】北島三綱―前掲書『出雲国皇学者歌人学系略初編』「富永芳久門人録」に「北島孝郷　大社上官亘人ト称ス又三綱トモ云フ」とある（二三頁）。　むれわたる―鴨長明「群れ渡る磯辺のあきさ（鳥の名）音寒し野田の入り江の霜の曙」。　田鶴の羽風に―兼昌「乗りて行く鶴の羽風に雲晴れて月もさやけく澄む山辺かな」　千代よはふなり―「千代よ」は「千代代」であろう。「よ（与）」は、文書では「と」とも読むので、「千代と」（千代というぐらいに）かもしれない。亀山院「草香江の入り江の田鶴も諸声に千代に八千代と空に鳴くなり」。また、文治六年女御入内和歌「四方の海の蜑の塩屋も数添ひてうらわの千鳥ちよよ這ふなり」は末句が全く同じであるが、この歌の「ちよよ」は、千鳥の鳴き声と千代代をかねるようである。それならば千鳥城の縁で、本歌取りをしたのかもしれない。或いは、「千代呼ばふなり」を掛けて、松（待つ）から田鶴（発つ）への求婚の意を暗示するか。「なり」は断定の助動詞として解釈したが、伝聞（そうだ）・音声による推定（ようだ）の助動詞のつもりかもしれない。田鶴、亀、松、千代は、長寿に関わる縁語。また、鶴は仙人の乗物で、仙人そのものの象徴でもあり、めでたい。

6　　松井言正

萬代の　春は成にけり　亀田山　千鳥の大城　うちかすみつつ

【訳】いつまでも続く春とはなったようだ、亀田山は。大きな千鳥城が、少しかすんでいることだ。

【注】松井言正―『出雲国皇学者歌人学系略初編』「島重老門人録」に「松井言正　松江藩士理八ト称ス」とある。萬代の―萬代は、本来天皇の長寿を祈念するときの言葉。松江城の永続を祈るとともに、春の永遠に続くような感覚を詠んだのだろう。実雄「今年より深雪に契る山桜思ふも久し萬代の春」。　春は成けり―「は」はおかしい。「に」の誤刻か。或いは、萬代の春が完成したという気持ちか。新古今集「時は今春になりぬと深雪降る遠き山辺に霞たなびく」。　千鳥の大城―雨月物語・菊花の約「経久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外にはなたずして、遂にけふにいたらしむ」。千鳥の「多き」を掛けたか。　亀田山―亀と萬代は縁語。　うちかすみつつ―「うち」はほんの少しの意の接頭語。新古今集風のつつ止め。動作の継続や並行の意は薄く、「・・・していることよ」のような、柔らかな詠嘆を表す。後鳥羽院「今日までは雪降る年の空ながら夕暮れ方はうちかすみつつ」。「かすむ」といっている点に、春爛漫の気分と松江城の将来への不安がないまぜにこめられている。

7　　松江　菊川

水湖に　山の　尾を引　かすみかな

【訳】宍道湖に向けて城山の尾根がずっとのびている。霞もそれに沿ってずっとたなびいている。

【注】菊川―山内曲川以外、この時期の俳人の消息は殆どわからないのであるが、曲川が選句したとおぼしい、松江出版の漢詩・誹諧文芸誌『風流新誌』に出雲の俳人として菊川の名が見える。その一号（一八八一年）「万歳の袖ひろげるや大戸口　菊川」、その二号（一八八二年）「揚揚と何処へくづるる雲雀かな　菊川」。　＊山の尾が「ひく」、かすみがたな「びく」とを掛けた表現と考えた。松江城から宍道湖を見おろしたときの風景。逆に、宍道湖湖畔から松江城を眺めたのかもしれない。季語はかすみ（春）。亀（田山）が、塗中に「尾を曳く」という荘子・秋水篇の語をふまえるか。

○大橋鱸網

橋ノ一名ヲ分郡橋ト曰フ。島根、意宇両郡ノ一大橋ニシテ、其長サ一町十二間、此処即チ碧雲湖脚ナリ。西望東眺、共ニ相ヒ宜シ。毎歳立冬ノ候ヲ最トシテ、橋辺ニ漁船数十艘ヲ繋ギ、流ニ従テ、下ルトコロノ鱸ヲ網ス。鰓ノ数四アリ。其味絶ダ美ニシテ、恰モ支那ノ松江ノ鱸ノ如シ。故ニ此名夙ニ著ハル。

【訳】大橋の鱸網漁

大橋の別名は分郡橋。島根、意宇の二郡の境にある巨大橋であり、長さ一町十二間（約一三一メートル）、宍道湖の端にかかっている。西を望んでも、東を眺めても、どちらもすばらしい景色である。鱸の漁は、毎年立冬（十一月八日頃）の時節が最も盛んで、大橋のあたりに漁船数十艘をつないで、流れに任せて川を下ってくる鱸を網で捕らえる。鰓の数は四つある。その味は大変においしく、中国の松江の鱸に負けず劣らない。そういうわけで、大橋の鱸の漁は早くから有名である。

【注】大橋―松江大橋。この時期のものは、明治七年（一八七四）にかけられたもの（第十四代）。松江大橋の橋名が初めて定まり、松江のシンボルとなる（内田兼四郎編著　「松江大橋物語」一九七四）より）。　鱸網―日本のスズキは中国の鱸とは別の魚。スズキはハタ科の近海魚。夏に汽水域に上ってくる。中国の鱸は、カジカ科、淡水魚でドンコの類い。現上海の松江区の特産。蘇軾「後赤壁賦」に「狀は松江の鱸に似たり」。西晋の張翰が、故郷の呉の秋の風味を思い起こして、官を辞したという故事で有名。　碧雲湖―宍道湖の雅名。菅茶山によって命名されたという。宍（肉の異体字）は雅でないので、詩人達に愛好された。　湖脚―湖水が外へ流れ出すところ。楊万里・望雨「雲は興る恵山の頂、雨は放つ太湖の脚」。俗語。　鰓の数―中国の鱸は、別名四鰓魚であるが、日本のスズキは鰓の数に特徴はないようである。漢籍の知識のみで論じたか。日本のスズキは、出世魚として有名。　支那―中国。秦から派生か。中国で仏典を漢訳する際、インドでの呼称（シナスターン）を音訳したもの。西洋語のchina等の語源でもある。西洋の知識流入とともに、日本では江戸中期以後頻用された。ここの記述でもわかるように、元来は侮蔑等のニュアンスはない。

8　　釈　道光

湖天飛霰日将晡、橋上行人粛々趨。漁父不知寒気甚、驚濤翻処網銀鱸。

【訓読】湖天霰飛び日将に晡れんとす、橋上の行人粛々として趨く。漁父は知らず寒気の甚だしきを、驚濤翻える処銀鱸を網す。

【訳】湖の上の空に霰が飛び日は暮れようとしている。橋の上を人々がしずしずと先を急いでいる。漁師はひどい寒さもかまわず、恐るべき大波がかかってくるところで、銀色の鱸を網で捕らえている。

【注】釈道光―一七四六～一八二九。名は日謙。大阪生まれ。漢詩に優れる。出雲に来て平田法恩寺住職となる。晩年近くは松江に閑居。この詩の出処は不明。（『島根県歴史人物事典』）　湖天―ここは湖の上の天でよいであろう。湖に映った天とも考えられる。王維・使至塞上「帰雁湖天に入る」。　粛々―様々なニュアンスのある漢語だが、道光と交流のあった頼山陽の題不識庵撃機山図「鞭声粛々夜川を過ぐ」と同じく、静かに歩くさまであろう。また、だらだらせずに先を急ぐ早歩きの気持ちもあるか。詩・召南・小星「粛粛宵に征き、夙夜公に在り」。その毛伝「粛粛、疾き貌」。高適・東平旅友奉贈薛太守二十四韻「粛粛として朝列に趨く」。　驚濤―人を驚かしめるほどの波。曹丕・滄海賦「驚濤暴かに駭き、騰踊澎湃す」。大橋川や宍道湖は、天候が荒れると、魚がよく捕れるらしい。以下の作品も同様の趣旨が見られる。　銀鱸―張弼・雲山図「紫蟹銀鱸価を論ぜず」。

9　　釈　天鱗

枯蒲葉爛不籠烟、寒碧遙涵惨澹天。漁子豫知風浪起、江心争杙捕鱸船。

【訓読】枯蒲葉爛れ烟に籠められず、寒碧遙かに涵す惨澹たる天。漁子豫め知る風浪の起たんことを、江心争いて杙す捕鱸の船。

【訳】枯れたガマの葉はすっかり落ちて、もや一つかからず景色はくっきりとして清冽である。寒い緑色の湖面は遙か彼方まで暗い空を浸している（映している）。漁師達は風波が立って大漁になるだろうと予想して、大橋川の真ん

中で先を争ってすずきとりの舟を杭につないでいる。

【注】釈天鱗―一八〇七～一八九一。江戸後期から明治時代の僧。仏教はもとより、漢学、和歌、詩文に長じた。真宗大谷派。松江永泉寺の住職。明治三年松江藩校修道館でおしえ、のち家塾を寺内にひらいた。俗姓は河野。字は縦壑。号は苔州、竺浪、石窓、三蕉。（『島根県歴史人物事典』）。　爛―腐ってしまうこと。庾信・対雨「爛草初螢に変わる」。　籠―かごのように覆い包むこと。元稹・雑憶詩五首其二「花は微月に籠められ竹は煙に籠められる」。　寒碧―冬の湖面の冷たい感じのみどり色。姜夔・暗香詞「長えに記す曽て手を携えし処、千樹圧す、西湖の寒碧を」。　慘澹―董仲舒『春秋繁露』治水五行「金事に用いる。其の氣は慘淡にして白し」。杜甫・北征「陰風西北より来る、慘澹として回紇に随う」。山陰特有のすさまじくて薄暗い曇天のこと。　漁子―漁人、漁父に同じ。郭璞・江賦「是に於いて蘆人漁子は江山に擯落す」。孟浩然・夜渡湘水「漁子潭煙に宿す」。　豫知―漢書・丙吉伝「時は豈に豫め天下の福を知りて其の報いを徼めん哉」。　杙―舟をつなぐ杭。動詞化して、杭に舟をつなぐの意。王安石・歌元豊「楊柳の中間に小舟を杙す」。

10　内村鱸香（うちむらろこう）

行舟稍遠泛群鳧、飄霰如珠撲荻蘆、昨夜寒風捲驚浪、漁人得意捕銀鱸、

【訓読】行舟稍（こうしゅうやや）遠（とお）くして群鳧泛（ぐんふうか）び、飄霰珠（ひょうさんたま）の如（ごと）くして荻蘆（てきろ）を撲（さく）つ。昨夜寒風驚浪（さくやかんぷうけいろう）を捲（ま）き、漁人意（ぎょじんい）を得（え）て銀鱸（ぎんろ）を捕（と）る。

【訳】鱸漁の舟が少し遠いところを漕いでいき、そのあたりには沢山のカモメが群がっている。ぱらぱらと風に吹かれた霰は、真珠のように荻や蘆をうつ。昨夜寒風が驚くほど大きな波を巻き上げた。おかげで、今日は大漁、漁師達は思いのままに銀色の鱸を捕るのである。

【注】内村鱸香―一八二一～一九〇一。松江生まれ。名は篤棐。通称は与三郎、友輔。幕末、明治の儒学者。大阪、江戸に遊学。幕末、帰郷して、藩校で儒学を講ず。明治七年、私塾相長舎を開く。かたわら、明治九年より明治一九

年まで、松江中学校等の教師となる。星野文淑の師。星野の墓誌銘も撰す。（『島根県歴史人物事典』）　行舟―行く舟。舟を行かしむ、ではない。曹丕・善哉行「湯湯たる川流、中に行舟有り」。　珠―珠といえば、蘇軾・六月二十七日望湖楼酔書「白雨珠を跳らせて乱れて船に入る」。　驚浪―驚くべき強い波。左思・蜀都賦「流漢湯湯として、驚浪雷のごとく奔る」。驚は漢音ケイ。　得意―満足の行くこと。得意げに、というのとは、ニュアンスを異にする。銀鱸―8参照。

11　杉聴雨

秋風吹老松江水、知是鱸魚味方美。昨夜長竿有獲不、漁翁猶宿蘆花裏。

【訓読】秋風吹きて老いしむ松江の水、知る是れ鱸魚味方に美ならんことを。昨夜長竿獲ること有りや不ずや、漁翁猶お宿す蘆花の裏。

【訳】秋風が吹いて、松江の川も、老衰したような気配になってしまったが、それはかえって、スズキはこれからがうまくなるということを我々に知らせてくれるのである。昨夜あの長い釣り竿で魚を捕ることができたかしら。年寄りの漁師が一晩越しで花咲く蘆の茂みの中になおも留まっている。

【注】杉聴雨―孫七郎。山口出身。一八三五～一九二〇。幕末から大正の武士（山口藩士）、官僚。書画に秀でた。（『日本人物大事典』）この詩の原典、松江来訪の事情等未調査。　吹老―吹いた結果、対象が老いるという文法構造。「打死」（殴り殺す）等と同じ。戴復古・渓上「秋風吹きて老いしむ木綿の花」。　不―音フウ・フ。文末に用いて一種の反復疑問文をつくる。「・・・したか、しなかったか」ではなくて、「・・・したか」。　宿―一晩留まること。柳宗元・漁翁「漁翁夜西巖に傍いて宿す」。　蘆花―蘆の穂わた。晩秋の景物。宍道湖や大橋川はかつて蘆に一面おおわれていたそうである。李白・姑孰十詠・丹陽湖「鳥は宿す蘆花の裏」。

12　島　重養

大橋の　下ゆく波の　よるとなく　昼も鱸の　幸やまつらむ

【訳】大橋のたもとに絶えることなく寄る波のように、夜となく、昼となく、漁師達はいつも鱸がかかるのをまっているようである。（そのように、私も恋人との出会いを待ち望んでいる）

【注】島重養―既出。　下行く波の―原文は「の」字を脱す。藤原家隆「春風に下行く波の数見えて残るともなき薄氷かな」。　よるとなく―「よる」は、「寄る」と「夜」の掛詞。　昼も鱸の―論語『子川上に在りて曰く、逝く者は斯くの如きかな、昼夜を舎（お）かず」。昼夜を舎（捨）てずとも訓読できるので、「捨（つ）」と鱸の「す」とを掛けているのかもしれない。大中臣能宣「御垣守衛士の焚く火の夜は燃え昼は消えつつものをこそ思へ」。　幸―自然からとれる産物。海の幸、山の幸というときの「さち」。眼前の実景を詠みつつ、恋人の「寵幸」も掛けていると思われる。13以下の和歌の「さち」も同様。同時期に歌会等で作られたか。　らむ―現在推量の助動詞であるが、「なぜこんなことをしているのだろう」という疑問の語気が漂う。

13　別火千秋

鱸とる　網さちおほみ　大橋を　過がてにして　人ぞ賑はふ

【訳】網にかかった鱸の量があまりに多いので、沢山の人が、大橋をそのままわたってしまうのを惜しんで、立ち止まって賑やかに見物している。

【注】別火千秋―松江の漢詩和歌雑誌『風月小誌』第二号に、「別火千秋　出雲杵築人」として、「寒夜衾　かさねども衾おもしと思はぬは身より心の寒きなりけり」を載せる。略歴未調査。　網さち―網にとれた獲物。　おほみ―正式には「網さちをおほみ」。「・・・を・・・み」は「・・・が・・・なので」。　過がてにして―「過がて」はもと「過のて」に作る。変体仮名「可」の彫り間違いか。今正す。「がてに」の古形（万葉集）は「かてに」らしいので、ここも清んでよませるつもりかもしれない。後撰集「誰聞けと無く雁がねぞ我が宿の尾花が末を過ぎがてにして」。

14　長谷川龍衛

大橋の　ながき世かけて　曳く綱の　あみめもらさぬ　幸ぞ楽しき

【訳】大橋ははなはだ長い、そのような長い夜を通して、漁師達は網の綱を引いてきた。その結果、網目を一つももらすことがないほどの大漁になって嬉しくてたまらない風である。

【注】長谷川龍衛―出雲の神職であったようであるが、未調査。　ながき―大橋が「長」いのと、夜が「長」いのを掛けている。　世―「よ」とよんで、鱸漁の描写としては「夜」の義で用いたのであろう。ただ、この和歌も恋愛を暗喩していると考えられるので、男女の仲の義の「よ」も掛けているのであろう。また、一夜ではあるが、心理的に幾世代にもわたるような長時間に感じられるという気持ちで「世」の字を用いたのかもしれない。単に「あさきせ（浅き瀬）」等と混同して、彫りまちがえたのかもしれない。藤原実教「移り行く人の心は花葛長きよかけて何たのみけむ」。　曳く綱の―柿本人麿「彦星の妻まつ舟の曳く綱の絶えむと君に我が思はなくに」。夫木抄「風渡るいなはかたより曳く綱の長き幾代か秋田守るらむ」。　あみめもらさぬ―為家千首「片山の簀戸が竹垣網目より漏り来る秋の月の寂しき」。　楽しき―鱸をとる漁師はもちろん楽しく思うであろうが、見物する作者もうきうきするのであろう。恋の成就を暗喩するか。藤原定家「小忌衣白きを据ゑて盃の恵みに酔へる夜半ぞ楽しき」。

15　武田道年

大橋の　鱸のあみや　ゆるむらん　あから嶋風　吹たちにけり

【訳】大橋の下で、鱸の網漁をしているが、その網がゆるんでいるだろうか。突然の大風が吹き始めたから。

【注】武田道年―既出。　あから嶋風―暴風（ぼうふう）。あかしまかぜ。日本書紀・神武「海の中にして卒（にわか）にあからしまかぜに遇ひぬ」。あからしま（あからさま＝突然）な風という構造なので、「嶋」は単なる当て字であろうが、或いは宍道湖の嫁が嶋方向から吹く強風を意識するか。　吹きたちにけり―玉葉集「秋風も吹きたちにけり今よりは来る雁がねの音をこそ待て」。　＊思いがけない障碍による、恋情のゆるみや恋の破局を暗喩している

のかもしれない。

本訳注は、
山陰研究センター　山陰研究プロジェクト
1003 要木 純一　山陰地域文学・歴史関係資料の研究　実施年度：2010～2012年度
による研究成果の一部である。